

二〇一三年三月三日

賀茂うらら犬も飛石渡りけり
代々の雛みな飾る苦屋かな
旋回に傾ぐ機窓の雪の原
柔き日に翅をゆるめる胡蝶かな

大の文字抱きて東山笑ふ
春 天 に 鳥 の 群 れ 舞 ふ 賀 茂 河 原
掌 に の せ て 心 通 は す 落 椿
も う い い か い ま あ だ だ よ と て 森 う ら ら
寄 せ 波 に 手 伸 ば し 子 ら の 流 し 雛
爺 吾 と 孫 と 並 び て 麦 を 踏 む

踏青や夫唱婦隨に半世紀
大いなる鳶の輪の中春耕す
伸び縮みして遠足の列進む
手を繋ぎ園児ら唄ふチューリップ

二〇二三年三月一日

春山の裾野青空市の旗
連翹の一枝徒長す籬かな
植木屋に茶を汲む縁のあたたかし
いづくなく沈丁にほふ小路かな
家路へと唄が飛び出す春夕焼
この道や鳥語も喜喜と梅日和
山笑ふ老々介護がんばれと
春堤走る電車に手を振る子
啓蟄や野良着の破れ繕はむ

二〇二三年二月二八日

春暁や一灯のこる橋の下
春塵の古書運びだす棚卸し
強東風にぶつかりあへる祈願絵馬
春の雲吾にナンクルナイサーと
一一〇一三年二月二七日

糟糠の妻に感謝や愛のチヨコ
跳び箱の八段成功風光る
水曜はパン屋の来る日島うらら
耳立てて干支のうさぎの内裏雛
伸びすれば事務椅子まはる春の唇
一一〇二三年二月二六日

お雛さまごめん掃除の尻当たる
一刷毛のモップに消えし春ぼこり
吹き出して鶯餅の粉飛ばす
書き置きの端おさへたる蓬餅

二〇一三年二月二五日

啓蟬のくねる蚯蚓の砂化糰
乱れ髪そつと抑えて女雛置く
手招きに駆け寄ればほら露の薹
先達のめこぼしならめ蕨摘む
羨道の奥までくれば暖かし

毎日句会みのる選・二〇一一年三月五日